

(B) 活動・研究助成金 報告論文

『もう一つの国』における愛の政治学

諸岡 友真

Key Words アメリカ文学、ブラックフェミニズム、リンチ、去勢、黒人

1. 序章——愛を語ることの政治性

ジェイムズ・ボールドウィン (James Baldwin) の『もう一つの国』 (*Another Country*, 1962) における黒人女性アイダ・スコット (Ida Scott) の重要性は、多くの批評家たちに見過ごされてきた。ボールドウィン作品における複数の黒人女性キャラクターに注目したトラジャー・ハリス (Trudier Harris) でさえも、同小説の大半は、他の白人キャラクターたちの視点を通してのみアイダを描写するため、彼女を周縁化していると主張している。ブラックフェミニズムの先駆者たちは、公民権運動や女性解放運動における前者の性差別や後者の人種差別に幻滅し、権力構造の重層性を理論化すべく、人種的抑圧が発生する根拠を、ジェンダー、セクシュアリティ、階層などとの相互作用から分析するようになった¹。そうした文化批評のパラダイムのなかで仕事をしながら、文学表象における人種、ジェンダー、セクシュアリティの配置を解き明かそうとした批評家たちですら、アイダの重要性についてはほとんど触れてこなかったのである。それはつまり、これまでの研究ではアイダに集中する抑圧の状況を詳らかにすることが、『もう一つの国』の全体像

を理解することに繋がるという意識が希薄であったということを指す。

こうした批評状況の中、クリストファー・フリーバーク (Christopher Freeburg) の指摘は大きな価値を持っている。彼は、今まで人種、ジェンダー、セクシュアリティを論じる批評家たちが「愛」について触れてこなかったことを批判し、ボールドウィンはキャラクター間に「愛」が生まれることが困難な状況を描くことで、人種差別や性差別、同性愛嫌悪などの諸問題をあぶり出そうとしたと論じた (Freeburg, 2015: 181)。つまり、彼の指摘は、『もう一つの国』に通底する「愛」というテーマを、アイデンティティ・カテゴリーの複雑な絡み合いの中で論じる必要性を示しているのだ。

このような先行研究の動向を念頭に、本稿ではアイダと白人男性ヴィヴァルド・ムーア (Valdo Moore) との異人種間異性愛という、1950年代にあってなお逸脱的であった関係性を問題にしたい。特にアイダの存在が、ヴィヴァルドの愛の限界を浮き彫りにしている点に注目し、本作が批判的に物語化する人種、ジェンダー、セクシュアリティが、黒人に対するいかなる通念を形成しつつ、抑圧という事態を発生させているのか、その

点について考察する。そこから確認できるのは、黒人に対して加えられてきたリンチや去勢の歴史的記憶が、愛の障壁となっているとするポールドウィンの立場である。より具体的に言えば、リンチや去勢を正当化するためにアメリカ主流社会が構築してきた「黒人レイピスト」と「黒人売春婦」のイメージが、ヴィヴァルドとアイダの自己認識を混乱させ、二人の間に愛が生まれることを阻害しているのだ。そして、二人の白人男性と同時に関係を持つことになるアイダの存在が、同人種間の異性愛関係の内部に生まれる暴力の契機をも、暴露するさまを論じていく。男性同性愛のプロットが特権化されるあまり、これまであまり注目されてこなかったアイダに光を当てることで、テキストが「愛」の困難を語っていること、そしてその語りの政治性を明らかにすることを本稿の目的とする。

2. リンチや去勢の歴史的記憶と愛の不在

『もう一つの国』は、黒人男性ルーファス・スコット (Rufus Scott) がニューヨークを一人で彷徨った後、「世界でただ一人の友人」と称するヴィヴァルドの部屋を訪れる場面で幕を開ける (Baldwin, 1962: 13)。ヴィヴァルドは、ルーファスが付き合っていた南部出身の白人女性レオナ (Leona) との痛々しい過去を話すのを聞いた後、彼をピザ屋に連れていく。ヴィヴァルドは、ルーファスが彼の前で精神的な傷を吐露した理由は、彼の空腹にあると考えたからである (Baldwin, 1962: 61)。その後、二人は寝酒をするため、ベノの店というバーに立ち寄る (Baldwin, 1962: 78)。この時ヴィヴァルドは、ルーファスの抱える問題や痛みを聴くことにうんざりしており、家に帰って一人で寝たいと考ながらも、そのことに罪悪感を感じている。二人はベノの店で、共通の友人である白人夫婦のリチャード・セレン

スキー (Richard Silenski) とキャス (Cass) に遭遇する (Baldwin, 1962: 81)。その白人夫婦は、夫のリチャードの小説が初めて出版されることが決まったのを祝うためベノの店に来ていたのだった。同じく作家志望のヴィヴァルドは、リチャードの幸運を聞き、翌日、彼の本を見るためにセレンスキー家に行くことを約束する (Baldwin, 1962: 83)。すると折しも、店から出ていくセレンスキー夫妻と入れ替わりで、ヴィヴァルドの元恋人、白人女性のジェーン (Jane) が入店し、ヴィヴァルドとルーファスの会話の中に加わってくる。ルーファスの話に疲れていたヴィヴァルドは、ジェーンと嬉々として話し始め、親友を間接的に邪魔者扱いする。それを感じ取ったルーファスは、一人ベノの店をあとにすると、地下鉄に乗って彷徨し、最終的にハドソン川に身を投げる (Baldwin, 1962: 93)。

以上は『もう一つの国』の第一章を粗描したものである。ルーファスの死と、彼の苦しみに無関心なヴィヴァルドの態度は、その後続くプロットの土台となる。ルーファスの死は、ヴィヴァルドとアイダとの恋愛関係が生まれるきっかけを作ると同時に、二人の関係を引き離す要因ともなってくる。二人の関係が構築されるのは、ルーファスが自殺を遂げた翌日である。ベノの店で約束した通り、ヴィヴァルドはリチャードの原稿を見るためにセレンスキー家を訪れる。すると、しばらくしてその場には、ルーファスの妹であるアイダも現れる。6週間にわたり、愛する兄を探していたアイダは、ヴィヴァルドが、死の前夜にルーファスに会ったことを知り、セレンスキー家を訪ねたのである。しかし、彼女の期待はすぐに裏切られることとなる。ルーファスを見かけた者たちはすべて、彼の動向にまるで無知だったからである。自らの無知を必死に取り繕う白人たちへ、アイダは無言で激しい怒りを向けるのであった。

だが彼女の怒りを感じ取ったヴィヴァルドが、ルーファスに対する愛と、その夜彼を一人にしたことに対する後悔を述べるに至ると、アイダは「初めて本当に彼と出会った」かのように彼の方

を振り向く (Baldwin, 1962: 106)。この瞬間、二人はまるで「同盟関係」を結んだかのようにお互いを見つめ合うことになり、以後、プロットの中核をなすようになる二人の関係が開始される (Baldwin, 1962: 107)。アイダにとって、兄のルーファスは最愛の人物である。よって彼女のヴィヴァルドへの愛情は、兄を愛した他者に向けられた彼女のルーファスへの愛の延長と言える。

このように『もう一つの国』は、ルーファスの死という悲劇から逆説的に生まれた異人種間の異性愛関係を描き始めるが、テキストが強調するのはむしろヴィヴァルドとアイダの関係が、いかにルーファスの不在によって阻害されているかという点である。言い換えれば、ボールドウィンが、異人種間の愛の不可能性を描くことを通して、その原因となっている要素をあぶり出しているのである。とりわけ小説中では、ルーファスの死に対するヴィヴァルドの無関心が、何度もアイダによって取り上げられ、非難される。

例えば、テキスト後半でアイダがキャスに、ヴィヴァルドと結婚しないのかと尋ねられた際、彼女はきっぱりと結婚の意思を否定している (Baldwin, 1962: 340)。彼女はその理由として、ヴィヴァルドはルーファスが死に瀕しているのを理解できなかったことを挙げている。さらに彼女は、ヴィヴァルドがルーファスの苦しみを知りたくなかったのは、もしも彼が黒人でなかったとしたら死ななかったという事実と向き合うことができないからだと主張する (Baldwin, 1962: 344)。ヴィヴァルドが目を逸らそうとする黒人の苦しみの原因は、白人からの性的な暴力である。アイダはヴィヴァルドに、南部白人男性であるエリック (Eric) はルーファスとセックスすることを望み、白人は黒人を性的な玩具として扱っていると述べる (Baldwin, 1962: 318)。エリックとは、ルーファスと過去に交際していたが、白人を憎むルーファスの激しい暴力に耐えきれず、フランスへ移住したアメリカ人俳優である。

アイダのヴィヴァルドへの批判によって浮き彫りにされているのは、白人男性のヴィヴァル

ドが、黒人男性に対して抱いている性的な興味である。先ほど触れたアイダの白人批判に対してヴィヴァルドは、ルーファスとエリックとの関係は、彼女の非難するような性質のものではなかったと返す。これを聞いたアイダは、「何が起こったかちゃんと知ってるくせに。ただあなたは知りたくないだけ」と、またその無関心を指摘する (Baldwin, 1962: 318)。エリックとルーファスとの性関係を実際に見たことがないのにも拘わらず、ヴィヴァルドが、二人の間に何が起こったか知っているということは、異人種間の同性愛関係に関する通念が存在することを暗示している。さらにエリックがその通念に強く影響されていることは、彼が南部出身であるという設定によっても補強されている。

南部の土地は、リンチと去勢の歴史と深く結びついている。ハリスによれば、南部で行われたリンチの主要な理由は黒人男性が白人女性をレイプするという容疑であり、「女性に対する性的脅威を取り除く」手段としての去勢がリンチの儀式に組み込まれた (Harris, 1984: 15)。他方でリンチを正当化するため、白人女性の「純潔性」に、制御できないほどの野蛮な性欲を向ける「黒人レイピスト」という虚像が構築された (Bederman, 1995: 46)。さらに「黒人レイピスト」というフィクションは、ほかならぬ白人男性にこそ、黒人の男性器に対する性的な興味やオブセッションを抱かせるに至ったとも言われている (Harris, 1984: 15)。ハリスによれば、奇妙に歪んだ欲望は去勢の瞬間に表面化する。リンチの首謀者たちは黒人を取り囲み、性器を「まるで愛撫するかのよう」な素振りを見せつつ、最終的に彼らが最も嫌悪するそのアンビヴァレントな欲望の対象を、一振りで切り落とす (Harris, 1984: 22)。

事実、アラバマ州出身のエリックは、黒人男性の性に関する言説を内面化し、その事実を自ら受け入れようとしているキャラクターである。彼はルーファスの白人に対する怒りから逃れてフランスにやってくるが、そこでイーヴ (Yves) というフランス人の少年と付き合うことになる。海の近

くに建てられた簡素な小屋の中で生活をしている二人であるが、エリックがアメリカで俳優の仕事を得たことで、彼は自身の過去を回想し始める。この回想には、彼が初めて身体接触を経験した黒人男性のヘンリー (Henry) の記憶や (Baldwin, 1962: 197)、さらには彼が初めて性行為をしたりロイ (LeRoy) という黒人少年の思い出が含まれている (Baldwin, 1962: 205)。エリックは、ルーファスが彼に及ぼした影響力は、こうした過去と関係があると感じている。また、彼の過去への「入口」となっているのが (Baldwin, 1962: 200)、どこかしらルーファスと似たところがあるイーヴの男性器のイメージであることは重要である (Baldwin, 1962: 191)。つまり、ルーファスの生き写しであるイーヴを通して、エリックの黒人男性器に対する欲望が示されているのである。「イーヴの性器が、エリックの長い人生風景を支配したのだった」(Baldwin, 1962: 221)。これはエリックがイーヴとの性行為を経験した時に抱いた感覚の描写であるが、イーヴの男性器は彼の人生を支配する、ルーファスの記憶を伴った影響力として表象されているのである。

アイダが、ルーファスとエリックとの関係に関してヴィヴァルドが知っていることだと指摘するのは、この男性器に物象化されたルーファスの位置づけである。それはまた、リンチや去勢の歴史が生み出した黒人男性像に対する、白人男性の性的興味のことである。すなわちヴィヴァルドは、黒人男性への性的な空想の介在なくしては、ルーファスを見ることはできなかつたとアイダは指摘しているのである。ヴィヴァルドが偶然入ったバーで、白人女性を見るという場面があるが、そこにも彼の黒人男性器に対する興味を垣間見ることができる。彼は自分より社会的地位の高い女性を見る際には、なぜか無意識にルーファスの視点におのれを置いているのである。つまり彼は、ルーファスならば白人女性の身体をどう見るかと想像し、そこに性的欲望を感じているのだ。すると突然、彼の頭には、「お前は黒人の勃起をする」というルーファスの笑い声が響き渡る (Baldwin,

1962: 296)。言い換えれば、ヴィヴァルドは、ルーファスの視点に同一化することで、欲望の投射される器官としての、黒人の男性器との同一化をも試みるということである。だが、ルーファスの視点と同一化しようとする自身に気付いたヴィヴァルドは、実存的な恐怖を味わう。白人の自分が黒人であるルーファスと同一化することは、彼にとっては許され得ない倒錯を意味するからである。彼は、「白人男性」というアイデンティティが剥奪される恐怖のため、彼自身の内部に潜む黒人に対する欲望と向き合えず、代わりにその欲望の存在を隠蔽する。そしてそれが、彼がルーファスを理解することをやめた理由ともなった。

したがって、ヴィヴァルドが、過剰な性の付された虚像と自意識の、いわば「二重意識」に引き裂かれたルーファスの苦しみを知るためには、彼自身もつ黒人男性への性的な想像を客観化することが必要である。しかし、自身の欲望を抑圧するヴィヴァルドは、当然ルーファスの死も直視できない。またアイダはそれを察するがゆえ、ヴィヴァルドの愛情を信じることができないのである。彼女はヴィヴァルドに、「ルーファスについて知りたくないことがたくさんあるのに、どうして彼を愛していたなんて言えるの？あなたが私を愛しているなんてどうして信じられるの？」と彼の腕を掴みながら問いかける (Baldwin, 1962: 319)。黒人が性的虚像により軽蔑され、精神的孤立を強いられる状況を理解できないヴィヴァルドを、彼女は責める。彼がルーファスに、さらには彼女自身に抱いていると主張する愛情は、つまり、黒人の性をめぐる虚構に阻まれていることになる。

3. アイダの歌う愛の困難

最愛の兄の死後、アイダは白人への復讐のために歌手となることを決意するが、その目標を遂げるため、ヴィヴァルドとの交際と軌を一にして、

別の白人男性エリス (Ellis) とも関係を持つ。テレビプロデューサーのエリスは、黒人を使ったテレビ番組で多くの賞を受賞したことで有名であるため、彼女は自らの成功、ひいては人種社会への復讐のために、彼を利用しようと画策するのだ。ルーファスを死に追いやった白人の一人でもあるヴィヴァルドを愛することに葛藤を抱えるアイダであるが、事実ヴィヴァルドの存在が、彼女とエリスとの関係を耐えがたいほど醜悪にする。テキストの最終部、アイダはヴィヴァルドに、エリスとの浮気を告白し、彼との性的な関係が引き起こした吐き気について述べる。彼女は、ヴィヴァルドの「ことを愛している」ため、それを全て「話さなきゃならなかった」と打ち明ける (Baldwin, 1962: 419)。つまりアイダは、エリスとの関係に対する嫌悪を感じることで、そうした感情を引き起こしているヴィヴァルドへの愛情を、逆説的に痛感するに至るのである。

それでもなお、アイダとヴィヴァルドの間には愛が生まれることはない。彼は、ルーファスとエリックとの関係から目を背けたように、アイダとエリスとの間に性的な関係が構築されていることを、知ろうとしないからである。自らに対して無関心なヴィヴァルドの態度ゆえに、彼からの愛情を信じることができないアイダは、愛憎が複雑に入り混じる声で彼に言う。「あなた、その人のことをなんにも知らないでいて、その人を愛せる？ あなたは、これまでわたしがどこにいたのか知らないでしょ。わたしにとって人生がどんなものかも分からないでしょ」 (Baldwin, 1962: 319)。アイダは、彼女とエリスとの関係や、黒人女性としての彼女の人生が一体何を意味するのか、そうした知識に対して無垢であろうとするヴィヴァルドを非難し、彼の愛情を疑うのである。

なぜヴィヴァルドは、アイダとエリスの関係を直視することができないのであろうか。それはヴィヴァルドが無意識的に、彼女のことを誰とでも性関係を持つ「黒人売春婦」として見ている事実を直視せざるを得なくなるからである。彼が無意識のうちに偏見を持っていることは、作家

として成功したりチャードの出版記念パーティーに呼ばれたヴィヴァルドとアイダが、そこで初めてエリスと出会う場面で示されている。エリスは彼女を見るとすぐに近づき、彼女の将来の夢を尋ねる。彼女が歌手になりたいと答えると、彼は名刺を渡し、夢を手助けする意志を伝える。こうした一連の流れを見ていたヴィヴァルドは、怒りと嫉妬を露わにし、キャリアのためにエリスと話をしてくれるようアイダに言うのである。それに対して彼女は、涙を流しながら、彼に「あなたは私のことを売春婦としか見てないんだ。だから、私と会いたいでしょ」と述べ (Baldwin, 1962: 170)、彼の偏見を暴き出す。

ヴィヴァルドがアイダのことを性的な存在として見ていることは、彼がルーファスに対して人種化された欲望を感じていることと不可分である。なぜなら黒人男性に投影された野蛮なレイビストという虚像は、性的に不道德な「売春婦」という、黒人女性のステレオタイプと表裏一体だからである (Davis, 1981: 182)。つまり、黒人男性の非文明的な欲望という言説が、黒人女性のセクシュアリティにも浸食してくるのである。しかし、黒人に対して性的な欲望を抱いていることを否認したいヴィヴァルドは、アイダとエリスの関係を話題に出さなくなる。なぜならヴィヴァルドが、エリスは彼女と性関係を持つようとしていると言うたび、アイダは彼自身が彼女のことを誰とでも関係をもつ女性として見ていると非難するからである。このようにしてヴィヴァルドは、アイダとエリスが性的な関係を持っているという妄想に苦しみながらも、彼とは何の関係もないというアイダの言葉を信じるふりをするので、彼女に対する偏見から目をそらそうとするのである。

つまりアイダは、ヴィヴァルドに対して愛を感じているのにも拘わらず、その愛が成就し難い状況へと追い込まれている。一方で、彼女はエリスとの関係を通してヴィヴァルドに対する愛情を痛感しているが、自分のことを無意識的に「売春婦」として見ているヴィヴァルドの愛を信じることができない。またアイダが、ルーファスを死に

追いやった白人社会への復讐として、歌手になるのを目指していることも、状況を複雑化している。彼女は、後でヴィヴァルドに全てを告白しているように、彼が彼女とエリスとの関係を暴き出し、その関係をやめさせることを恐れながら、実は同時にそれを望みもしている。アイダの恐怖は、エリスとの関係が中断させられることになれば、ルーファスのために歌手になるという夢を断念せざるをえなくなる可能性に由来している。しかし彼女は、エリスとの関係を断ち切りたいとも感じている。

このようにアイダは、ヴィヴァルドとの愛が不可能な状況に置かれている。それでもなお、彼女は愛を希求する姿勢を崩そうとはしない。むしろ彼女は、彼との関係によって受けた傷と、彼に対する愛を同時に、「愛するポーギー」(“I Love You, Porgy”)という歌に託し、「黒人売春婦」という虚像の中には到底おさまらない複雑なセクシュアリティを表現するという戦術に出るのである。歌手であるアイダの自己表現の戦略は、黒人女性ブルース歌手をめぐる史実に由来する。

ヘーゼル・カービー (Hazel V. Carby) によれば、女性ブルースは、第一次世界大戦後、黒人たちの北部への大量移住に伴って出現した (Carby, 1999: 8)。北部の都市に住んでいたジェシー・フォーセット (Jessie Fauset) やネラ・ラーセン (Nella Larsen) など、黒人中産階層の女性作家は、「エキゾチックで原始的」な黒人女性の性を隠蔽しようとしたのに対し、ブルース歌手たちは父権的秩序における女性のセクシュアリティの抑圧に対する反対の声を歌い上げ、自分たち自身の性を歌の中で表現した (Carby, 1999: 11)。しかし、黒人女性歌手の表現するセクシュアリティや主体性が、すぐに彼女たちの解放に繋がったわけではなかった。なぜなら彼女の夫たちは、セクシュアリティの発露としてのブルースを脅威とみなし、彼女たちの音楽活動を止めようとしたからである (Carby, 1999: 17)。

ブルースをめぐる男女間の衝突という背景があるからか、多くの女性ブルース歌手が黒人男性か

らの暴力を歌っている (Davis, 1999: 25)。ブルースはしばしば、黒人男性の暴力を受け入れる黒人女性の姿を描き、そうした女性表象がフェミニズムに反するという批判を受けてきた。しかし、アンジェラ・デイヴィス (Angela Y. Davis) は、そうした批判は、ブルースの歌詞に秘められた皮肉を見落としていると反論する (Davis, 1999: 26)。つまり、傷ついてもなお愛を希求する黒人女性像を描き出すブルースは、女の痛みの根源にある男性の暴力を非難しているのである。暴力批判と愛を同時に歌うブルースは、愛の困難さの表現媒体である。アイダは「愛するポーギー」で、ヴィヴァルドとの関係による痛みと彼への愛情という両面性を歌い上げ、さらには「黒人売春婦」というステレオタイプに抗するために、自身のセクシュアリティを表現する。

アイダが「愛するポーギー」を歌う様子が描写されるのは、マリファナを吸引したヴィヴァルドが、友人たちと共に屋根に登った場面である (Baldwin, 1962: 308)。ヴィヴァルドが薬物を使用した原因もまた、彼が内面化する「売春婦」という虚像にある。マリファナの吸引前、彼はキャストと会話をしているが、その間、彼の頭の中はエリスとアイダが性行為をしているイメージで埋めつくされている。なぜならヴィヴァルドとキャストが会話をする間、アイダはエリスと会っているからである。ヴィヴァルドは、意識を占めるイメージから逃げるため、友人と共に薬物を使用するに至る。だが、友人の一人、ハロルド (Harold) の家の屋根の上で、彼は不意にアイダが「愛するポーギー」を歌っている姿を思い出す。歌の中に、彼女の「秘密」と「非難」が込められていることに気づく彼は、歌を通して表現される彼女の「秘密の場所」に到達できれば、自分は彼女の「非難」から解放されると感じるのである (Baldwin, 1962: 308)。

「愛するポーギー」は、ジョージ・ガーシュウィン (George Gershwin) のオペラ『ポーギーとベス』(Porgy and Bess) のために作曲された歌である。芝居中でこの歌が歌われるのは第二幕第三

場、黒人女性ベスが足の不自由なポーギーに、彼女の事をクラウン (Crown) から守ってほしいと言った後である (Starr, 1984: 27)。クラウンとはベスの元恋人であり、彼女をレイプした黒人男性である (Crawford, 1972: 23)。クラウンから何とか逃げ帰ったベスは、「愛しているわ、ポーギー。彼に私のことを、熱い手で触れさせないで」と歌い、ポーギーに愛を告白することになる。

この歌の構図は、『もう一つの国』のアイダ、ヴィヴァルド、エリスの三角関係と呼応しているのではないだろうか。アイダが上に引用したベスの台詞を歌う時、彼女はすでにエリスと性的な関係を持っており、それを通してヴィヴァルドへの愛情を痛感している。歌詞の中の「ポーギー」はヴィヴァルド、そして「彼」はエリスを表している。この曲を通して、アイダはエリスと性行為をしたこと、エリスとの関係への嫌悪感、そしてヴィヴァルドへの言葉にできない愛を歌い上げるのである。とはいえ、アイダの歌には非難も込められている。彼女は、ヴィヴァルドとポーギーを結びつけることで、現実を直視できないヴィヴァルドの「障碍」を批判している。つまり、黒人の性的ステレオタイプに囚われたヴィヴァルドの盲目性は、アイダとエリスとの醜悪な関係、さらにはそこから発する彼女の痛み、彼が気づけないことを表している。それは同時に、彼が自らへ向けた彼女の愛情を知覚することができないことをも暗示する。実際にヴィヴァルドは、アイダの歌を思い出したにも拘わらず、「一体誰に向かって彼女は歌っているのだろうか」と考えるのみで (Baldwin, 1962: 308)、彼女が暗に歌詞に込めた悲痛な叫びも、愛の告白も聞くことができていない。

アイダは、ヴィヴァルドから「売春婦」として見られ、彼の愛情を信じることも、愛の欠如した彼を愛することも困難な状況に立たされている。そうした中彼女は、「愛するポーギー」を歌い、そこに表れた女性の愛と性への意志を臆さず表現するのである。歌の中で、彼女は無関心なヴィヴァルドへのある種の非難を歌いながらも、彼へ

の愛を告白している。このように、表現の困難な愛を歌うアイダの歌声、そしてその歌に込められた意味を聞き取ることのできないヴィヴァルドの関係は、愛の不可能性と、愛の生まれえない状況の中でもなお愛を希求する黒人女性の自意識を発露させているのである。

4. 同人種間の問題

ヴィヴァルドの盲目性によって、エリスとの性的な関係に放置されたアイダは、黒人男性からも「売春婦」として軽蔑されることとなる。その原因は、スモールズ・パラダイス (Small's Paradise) というジャズバーで、エリスがその場にいた黒人ミュージシャンたちと彼女を演奏させようとしたことにある。彼らはアイダと演奏したくはないものの、白人男性の命令に逆らうことが出来ずにそのまま演奏を行うが、その後ベース奏者がステージ上で彼女にこのようにささやくのである。

「おい、白人の黒い売春婦め。七番街なんかでおれにつかまらねえように気つけな。わかったか。おめえのあそこを引き裂いてやるからな。〔中略〕おれや二回やってやるからな。一つは、おめえが歩く度に去勢される黒人のためにな。もう一つは、おめえの気の毒な兄貴のためよ。おれはあいつが気に入ってたからな。」 (Baldwin, 1962: 415)

彼らは、意に反してアイダと演奏を強要された怒りを白人には向けられないため、彼女にぶつけているのである。

本当は、ヴィヴァルドと恒常的に親密な関係にあるにも拘わらず、アイダは、仕事欲しさに白人と「売春婦」まがいの関係を持っている者としてしか解されていない。黒人ミュージシャンたちは、白人男性と黒人女性への彼ら自身の偏見により、彼女にそのような心理的復讐を行っている。ベース奏者にしてみれば、それは彼が尊敬していたアイダの兄、ルーファスの恥辱でもあったので

ある。こうした黒人男性による黒人女性への仕打ちに透けて見えるのは、黒人コミュニティ内部における、さらには特に音楽業界における、男性優位の実態である。

ルーファスとレオナが最初に関係を結ぶことになるのは商業的に成功した黒人歌手の家であるが、この歌手は男性である。その歌手は、音楽の仕事以外にもボクシングや売春斡旋などの「手荒い仕事」に手を染めることで、成功したと書かれている (Baldwin, 1962: 25)。この一件些細なエピソードは、ルーファスが死に、物語が進んでフォーカスがヴィヴァルドとアイダの関係に移った後に、アイダの闘争の核心を指標する要因として、立ち戻ってくる。つまり、売春を斡旋した男性は成功を取めている一方、売春婦のステレオタイプと同一視される危険を冒したアイダは、エリスに利用され、さらには黒人男性ミュージシャンから軽蔑されることとなるのだ。はっきり書かれてはいないものの、結果、おそらく彼女は歌手になるという夢を諦めるであろう。スモールズ・パラダイスの一件で、彼女はエリスとの関係を続けることが、これ以上は不可能であることをヴィヴァルドに告白するからである (Baldwin, 1962: 414)。

ヴィヴァルドと黒人男性から、エリスとの性的関係について絶え間ない非難を受けることで、やがてアイダは「わたしは自分が憎い」とこぼすまでに至る (Baldwin, 1962: 413)。ルーファスの生前、アイダはむしろ、自分が黒人であることに対して自尊心を持ち、白人女性のレオナと付き合い合っていたルーファスには、「あなたはどんな貧乏白人でも、そいつが白人の女だったら付き合いんだ。どうしたっていうの——黒人であることが恥だっていうの？」という非難の言葉をかけるほどであった (Baldwin, 1962: 37)。果たして、彼女自身が白人男性と付き合いると、彼女もまた他者からの絶え間ない蔑視を向けられ、自身の黒い肌を憎むようになってしまう。アイダとヴィヴァルドの間に愛が育つ可能性は、彼女の自己嫌悪によって一層困難になっていく。アイダは、自身の肉体

を憎むことで、ヴィヴァルドの肉体をも嫌悪することになるからである。これは、彼女の自己嫌悪が、その黒い肉体に性的に惹かれるヴィヴァルドをも、憎悪の対象とすることを意味する。

黒人男性ミュージシャンは、アイダとエリスという異人種間の性愛関係をすぐさま逸脱的とみなし、彼女に嫌悪感を示しているが、それは彼ら自身の異常さをも映し出している。つまり、エリスと関係を持つアイダを、「売春婦」とみなすベース奏者の目は、ヴィヴァルドのそれと同程度に曇っている。そのため、「正常」とみなされる黒人同士の異性愛関係も、「逸脱的な」異人種間の性愛と同様、不可能性を帯びるに至る。竹村和子は、「学問研究や社会通念のなかで偏執的に語られている『病理』や『逸脱』や『許されぬ愛』の言説は、そもそも『不可能なエロス』を『可能なもの』と読み替え規範化するために抑圧されてきた事柄が、『失錯行為』として登場したものではないだろうか」と述べている (竹村, 2002: 10)。つまり、逸脱的とみなされる関係の中にある愛の不可能性は、規範的な性愛関係にも当てはまる。ヴィヴァルド、アイダ、エリスという逸脱的な三角関係における愛の不可能性は、規範的な同人種間の異性愛関係において隠蔽された問題——黒人男性の黒人女性への性的偏見——の存在を浮き彫りにするのである。

売春を斡旋することで、経済的成功を取った黒人男性歌手は特に、同人種間の異性愛関係の亀裂を示す好例である。彼は、女性へ一貫して、「愛情のある敵意」をもって接していると記されている (Baldwin, 1962: 25)。ここでは女性の人種が特定されていないが、それは白人と黒人両方に対するミソジニーを表しているからではないだろうか。テキストは、この男性が黒人女性に乱暴したり、侮辱したりする場面を描いているわけではないが、その根拠となりうることを仄めかしている。「彼は女性の扱いが上手である。〔中略〕そして、彼の現在の妻は四番目である」と記されるが (Baldwin, 1962: 25)、この箇所に入れられた皮肉こそは、彼の多情さを表す文のうちに読み取るこ

とができるだろう。つまり売春を斡旋していたこの男性は、黒人女性を軽蔑している。そのため彼は、正常とみなされる同人種間の異性愛関係も築くことができないのである。

アイダはエリスと関係を持つことで黒人内部の問題を露呈させたが、さらに彼女は白人内部における異性愛関係の異常さをも浮き彫りにしている。経済的基盤を持ち、妻子を持つエリスは、理想的で規範的な異性愛関係を構築しているキャラクターであると言える。彼は合法的な結婚という関係性の中で、異性愛が特権化している生殖という目的を達成している。「正常」な愛の中にあるエリスだが、彼は途方もない孤独感を抱えている。そして、彼の孤独の存在を知覚するのは言うまでもなくアイダである。

彼女は、エリスが「妻や子供たちの話をしている時でも、私のことを騙そうとしていると思わなかった。彼は本当に孤独だった」とヴィヴァルドに話している (Baldwin, 1962: 411)。竹村によれば、規範的な異性愛は、合法化と生殖という目的論によって、それ自体もまた不可能な愛であるということを隠蔽しようするものだという (竹村、2002: 126)。そして、目的論にそぐわない部分的で、偶発的で、一過的な不安や孤独は「個人のつぶやき」でしかなくなり、愛の不可能性は忘却されてしまう (竹村、2002: 126)。アイダがエリスの中に発見した得体のしれない孤独は、竹村の述べる「個人のつぶやき」に相当するものではなからうか。それは極めて個人的で、すぐ消え去ってしまう、声にもならない声である。エリスのそうした断片的な声を聞きとり、それをヴィヴァルドに伝えることで、言語空間へと連れだすことができるのは、アイダただ一人である。声にならないエリスの声を言語化することによって、アイダは白人の異性愛関係における「自然さ」や「正常性」が、嘘でしかないことを浮き彫りにしているのではないだろうか。

『もう一つの国』は、アイダとヴィヴァルドとの異人種間の異性愛関係における愛の不可能性を中心として描いている。しかしこの小説が描き出

す風景は、それだけには留まらない。二人の関係に不可避免的に関わってくる他の様々な関係性が、別の愛の問題を次々に示し出すのである。ボールドウィンは、人種、性、さらには社会階層を横断しながら、多種多様な関係における愛の困難を注視した。それらを描くことを通し、彼は愛が、政治性の別名であることを突き止めたように思われる。

注

- 1 ブラックフェミニズムの起源と理念に関しては、「コンバヒー川集合体」(The Combahee River Collective) の“A Black Feminist Statement”を参照。
- 2 人種、ジェンダー、セクシュアリティの相互作用に注目した批評家は、Dwight A. McBride, James A. Dievler, Aleyyah I. Abdur-Rahmanなどである。

参考文献

- Abdur-Rahman, Aliyyah I. 2015. “As Though a Metaphor Were Tangible”; Baldwin’s Identities.” *Elam*, pp. 164-179.
- Baldwin, James. 1962, *Another Country*. Penguin.
- Bederman, Gail. 1995, *Manliness and Civilization: A Cultural History of Gender and Race in the United States, 1880-1917*. The U of Chicago P.
- Carby, Hazel V. 1999, “The Sexual Politics of Women’s Blues.” *Cultures in Babylon: Black Britain and African America*, Verso, pp. 7-21.
- The Combahee River Collective. 2014, “A Black Feminist Statement.” *WSQ: Women’s Studies Quarterly*, vol. 42, no. 3-4, pp. 271-280.
- Crawford, Richard. 1972, “It Ain’t Necessarily Soul: Gershwin’s ‘Porgy and Bess’ as a Symbol.” *Anuario Interamericano de Investigacion Musical*, vol. 8, pp. 17-38.
- Davis, Angela Y. 1999, *Blues Legacies and Black Feminism: Gertrude “Ma” Rainey, Bessie Smith, and Billie Holiday*. Vintage.
- . 1981, *Women, Race, and Class*. Vintage Books.
- Dievler, James A. 1999, “Sexual Exiles: James Baldwin and *Another Country*.” *James Baldwin Now*, edited by Dwight A. McBride, New York UP, pp. 161-183.
- Elam, Michele, editor. 2015, *The Cambridge Companion to James Baldwin*. Cambridge UP.
- Freeburg, Christopher. 2015, “Baldwin and the Occasion of Love.” *Elam*, pp. 180-193.
- Harris, Trudier. 1985, *Black Women in the Fiction of James Baldwin*. The U of Tennessee P.
- . 1984, *Exorcising Blackness: Historical and Literary Lynching and Burning Rituals*. Indiana UP.

McBride, Dwight A. 1998, "Can the Queen Speak? Racial Essentialism, Sexuality and the Problem of Authority." *Callaloo*, special issue of *Emerging Male Writers*, vol. 21, no. 2, pp. 363-379.

Starr, Lawrence. 1984, "Toward a Reevaluation of Gershwin's *Porgy and Bess*." *American Music*, vol. 2, no. 2, pp. 25-37.

竹村和子、2002、『愛について——アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店。

ポールドウィン、ジェームズ、1977、『もう一つの国』野崎孝訳、集英文庫。